

平成 27 年度大気環境における放射性物質の常時監視に関する評価検討会(第 1 回)  
議事概要

1. 日時 平成 28 年 1 月 18 日(月) 14:00~16:00
2. 場所 航空会館 701・702 号室
3. 出席者(敬称略)

委員

- |        |  |
|--------|--|
| 小佐古 敏荘 | 東京大学工学系研究科 原子力安全工学講座 名誉教授  |
| 五十嵐 康人 | 気象庁 気象研究所 環境・応用気象研究部 第 4 研究室 室長  |
| 大原 利眞  | (国研) 国立環境研究所 企画部 フェロー  |
| 小田 啓二  | 神戸大学大学院 海事科学研究科 教授   |
| 兼保 直樹  | (国研) 産業技術総合研究所 環境管理研究部門<br>大気環境動態評価研究グループ 研究グループ長                            |
| 河崎 正利  | 福井県原子力環境監視センター 主任研究員   |
| 田中 敦   | (国研) 国立環境研究所 環境計測研究センター<br>同位体・無機計測研究室 主任研究員                                 |
| 藤田 博喜  | (国研) 日本原子力研究開発機構 バックエンド研究開発部門<br>核燃料サイクル工学研究所 放射線管理部 環境監視課<br>課長代理兼分析チームリーダー |

環境省

- |       |                  |
|-------|------------------|
| 瀧口 博明 | 水・大気環境局大気環境課長    |
| 伊藤 隆晃 | 水・大気環境局大気環境課課長補佐 |
| 松隈 大輔 | 水・大気環境局大気環境課課長補佐 |

事務局

磯貝 啓介、岸本 武士、伴場 滋、新田 済、佐野 友一、杉山 翠、式見 純一

オブザーバー 日立アロカメディカル株式会社

三上 章、島元 武志

4. 議題

- (1) 大気環境における放射性物質のモニタリング結果(平成 27 年末とりまとめ)について
- (2) その他

5. 資料

- |      |   |
|------|---|
| 資料 1 | 平成 27 年度大気環境における放射性物質の常時監視に関する評価検討会<br>開催要綱(案)    |
| 資料 2 | 平成 26 年度第 2 回環境放射線等モニタリングデータ評価検討会議事概要             |
| 資料 3 | 空間放射線量率及び大気浮遊じんの全 $\alpha$ 及び全 $\beta$ 放射能濃度の解析結果 |
| 資料 4 | 環境試料中の核種分析結果                                      |

## 6. 内容

主な審議内容を以下に示す。

### (1) 平成 27 年度大気環境における放射性物質の常時監視に関する評価検討会開催要綱(案)について

事務局より、資料 1 に基づき、平成 27 年度大気環境における放射性物質の常時監視に関する評価検討会開催要綱(案)について説明があり、審議の結果、承認された。

### (2) 平成 26 年度第 2 回環境放射線等モニタリングデータ評価検討会議事概要について

事務局より、資料 2 に基づき、平成 26 年度第 2 回環境放射線等モニタリングデータ評価検討会議事概要について説明があった。内容に一部誤りがあったため、修正した資料を配付することとした。

### (3) 空間放射線量率及び大気浮遊じんの全 $\alpha$ 及び全 $\beta$ 放射能濃度の解析結果について

事務局より、資料 3 に基づき、空間放射線量率及び大気浮遊じんの全  $\alpha$  及び全  $\beta$  放射能濃度の解析結果について説明があり、審議の結果、承認された。

主な意見を以下に示す。

- ・ 過去 3 年間、事故前 3 年間で評価しているが、今後はどのように比較するのかとの質問があった。事務局より、事故前 3 年間は固定(平成 20 年 1 月 1 日～平成 22 年 12 月 31 日)、過去 3 年間は当該年度に対してなので、1 年ずつ更新(なお今回の期間は平成 23 年 1 月 1 日～平成 25 年 12 月 31 日)していくとの回答があった。
- ・ 過去の調査結果は、何故 3 年間なのかとの質問があった。委員より、本調査は最近開始した調査なのでこのようにしている、また今後長くすることも可能ではあるが福島事故の残滓があるので 3 年で十分ではないかとの議論があった。
- ・ この調査の目的は何かとの質問があった。環境省より、一般環境におけるモニタリングなので、人工放射性核種の影響を確認するのも目的の中の 1 つだが、一般環境において変化がないか、もしあった場合には何が原因かというのを把握し、評価することを本検討会に期待しているとの回答があった。
- ・ サンプル数のデータを書き添えてはどうかとの意見があった。事務局より、次回の資料より検討するとの回答があった。
- ・ 「過去の調査結果の傾向の範囲内」であったとは、どういう意味かとの質問があった。事務局より、自然現象等により一時的に過去の調査結果を超過することはあるが、長期的に高い状態を維持しているものではないことを確認し、「過去の調査結果の傾向の範囲内」という表現を使用しているとの回答があった。
- ・ 全  $\alpha$  及び全  $\beta$  放射能濃度で過去の調査結果を超過した場合について、風の状態やラドンやその娘核種が溜まりやすい天候であったか等、確認されているのかとの質問があった。事務局より、風向、風速の評価はしていないが、降雨の有無、空間放射線量率の異常や通過率の低下が認められないかなどのデータを確認しているとの回答があった。

### (4) 環境試料中の核種分析結果について

事務局より、資料 4 に基づき、環境試料中の核種分析結果について説明があり、審議の結果、承認された。

主な意見を以下に示す。

- ・ Cs の放射化学分析では Cs-137 と Cs-134 の分離が出来ないという注釈について、前回の意見を反映してほしいとの意見があった。事務局より、次回から注釈を入れるようにす

るとの回答があった。

- ・ 大気降下物の佐渡関岬測定所の Sr-90 放射能濃度が高い試料に関して、安定 Sr との比の頻度分布等を取り、突出しているかを確認してはどうかとの意見があった。また、過去の範囲内であったとしているが、原因を調べた方が良いとのコメントがあった。事務局より、まずは頻度分布を調べてみるとの回答があった。委員より、3 ヶ月という採取期間を考えると原因を究明するのは難しいのではないかと意見があった。また、可能であればケイ酸塩を測定してみてもどうかとの意見があった。
- ・ 大気浮遊じんのブランクろ紙の表記が Bq/試料となっているが、実際はどれくらいの寄与になるか検討されているかとの質問があった。事務局より、詳細な数値は回答できないが、計算するときには mBq/m<sup>3</sup> に換算しているとの回答があった。
- ・ グラフで 1σ から 3σ と、3σ 以上のプロットについて同じ色で表記されているが、区別することはできるかとの質問があった。事務局より、今後検討したいとの回答があった。
- ・ これまでに蓄積されたデータを、データベースから使用できるようにしないのかとの質問があった。事務局より、結果は報告書の形では毎年公開されている、環境放射線データベースに入っているかは確認が必要であるとの回答があった。
- ・ 過去の調査結果との比較について、過去 3 年間の値が事故前 3 年間の値より低くなった場合でも事故前 3 年間の値を引用するのかとの質問があった。事務局より、福島事故の残滓がある間は、過去 3 年間、事故前 3 年間の調査結果を使用するつもりであるとの回答があった。

以上